老上学区モデル事業の振り返り・成果と課題

【資料1】

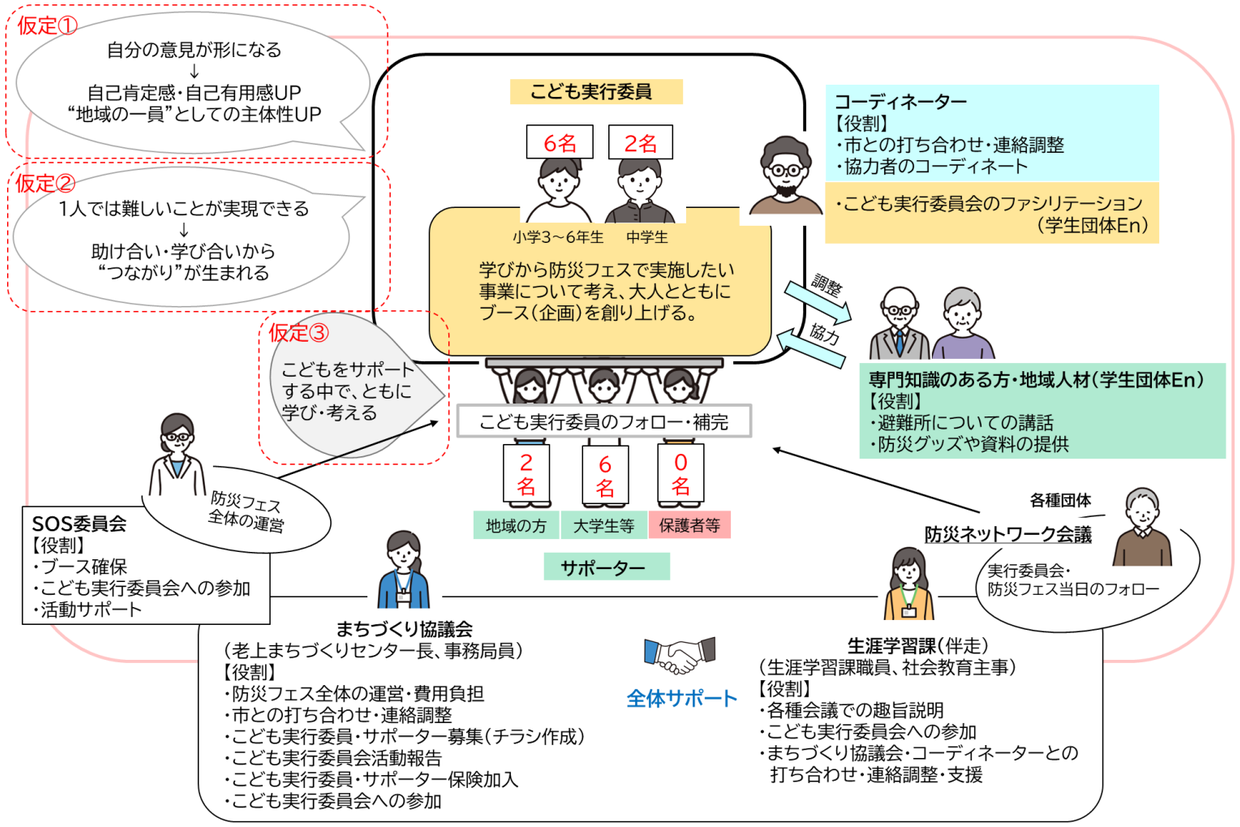
1．モデル事業の概要

≪モデル事業≫
老上学区防災フェス　こども実行委員会

≪運営方法≫
・公募により集まったこどもと、コーディネーターが中心に運営する実行委員によるブース（ステージ）の企画・運営
・防災フェスまでの約2か月半の間、5回の実行委員会を実施
・まちづくり協議会・SOS委員・生涯学習課はこども実行委員会の伴走支援

≪趣旨・目的≫
地域の大人とこどもが同じテーマについて共に活動することで、こどもが主体となって、「自ら考え、行動できる人材の育成」に取り組むとともに、地域のつながりやかかわり、地域の一員としての主体性をはぐくむ

≪実行委員会の様子≫
・コーディネーターやサポーターがこどもの意見をうまく引き出し、積極的に発言する姿が見られた
・ともに活動する中で、こども実行委員が意見を出し、こどもと大人の共学びを通じて大人の経験を取り入れ企画を磨き上げていた
・防災フェス当日は参加者に向けて防災の大切さを伝えていた



2．モデル事業の成果と課題

	成果	課題
こども実行委員	○ 自分が考えた企画が採用されたことが嬉しかった ○ 当日は緊張したが、最後までやり遂げることができて気持ち良かった ○ 頑張りを家族に褒めてもらえた、先生が見に来てくれて嬉しかった ○ みんなで取り組めて知らないことを知れた、大学生から防災の知識を教わった ○ 他の参加者と学年を超えて仲良くなれた、大学生にも心を開くことができた ○ 実行委員会に参加するのが毎回楽しく、また来年も参加したい ○ 大きくなったら今回の大学生のように自分がリーダーとして地域で活動したい （主体性／自己肯定感 自己有用感／共学び／つながり／地域参画）	▲ 毎回参加したかったが、部活等で実行委員会を休むこともあった
まちづくり協議会 まちづくりセンター	○ こどもが主体的に関わる姿が見られ、大人の常識にとらわれない新しい発想が生まれた ○ コーディネーターが楽しい雰囲気を作り、こどもの意見をうまく吸い上げていた ○ 多様な大人の存在は欠かせないものであった （主体性／コーディネート／つながり）	▲ 事業終了後、こども実行委員に継続的に関わってもらう受け皿を用意できていない ▲ 地域内外の良い人材に関わってもらえたが、発掘することは困難
コーディネーター サポーター	○ こどもたちがすごく活発で、一緒に楽しみながら作っているという感じがあった ○ 答えはひとつじゃない（多様性がある）ことを改めてこどもたちから学んだ ○ こどもにも理解してもらうため、伝え方を工夫したり、勉強になった ○ 地域と繋がれたことに達成感がある ○ 機会があれば地域活動に今後も参加したいと思うようになった ○ 知り合いからの声かけがあったため、 参加しやすかった ○ こどもの主体性を引き出せるように口出しを控え主体性を尊重することを心掛けた （つながり／共学び／地域参画／主体性）	▲「楽しさ」と実際の災害時を想定した企画のバランスを取ってのアドバイスが難しかった ▲ 小学校3・4年生の集中力が切れたときの対応が難しかった ▲ コーディネーターとサポーターの役割分担がわかりにくかった

3．仮定の検証

仮定①　主体性　自己肯定感 自己有用感

自分の意見が形になることで、自己肯定感・自己有用感の上昇、“地域の一員”としての主体性の上昇が見られる
→企画が採用されたことや周囲の人からの声掛けにより、こどもたちが主体的に関わる姿が見られ、自己肯定感の上昇につながった

仮定②　つながり

1人では難しいことがみんなでやれば実現できることで、助け合い・学び合いから“つながり”が生まれる
→みんなで楽しみながら企画を作り上げることで、年齢を越えた“つながり”が生まれた

仮定③　共学び

大人はこどもをサポートする中で、こどもと、ともに学び・考えることができる
→大人はこどもから改めて学ぶことがあり、こどもは大人から知らないことを知るなど、お互いに学びがあった

想定していなかった成果　地域参画

・こども・大人ともに今後の地域参画の意識が芽生えた